

冒険と計算

冒険と計算

武田泰淳

講談社

1966

冒険と計算



定価／六四〇円

昭和四一年六月一〇日発行

著者／武田泰淳

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽町三ノ一九

電話 東京（九四二）一一一一（大代表） 振替 東京三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／株式会社大進堂

©武田泰淳 昭和四一年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

Printed in Japan

序文

「人間・文学・歴史」（昭和二十九年五月、厚文社版）

「みる・きく・かんがへる」（昭和三十二年五月、平凡社版）

「現代の魔術」（昭和三十三年七月、未来社版）

「政治家の文章」（昭和三十五年六月、岩波新書版）

「私の映画観賞法」（昭和三十八年一月、朝日新聞社版）

「わが中国抄」（昭和三十八年五月、普通社版）

「日本の夫婦」（昭和三十八年十月、朝日新聞社版）

これらの評論集のあとも、あきもこりもせずに評論を書きつづけたが、昭和三十九年以後、一本にまとめることはなかった。それは、まことに自分でも驚くほどの大量の堆積となり、とても怠慢な私自身では整理しきれるものではなかった。どんな短い文章でも、やすやすと書き流せたことは一回もない。私の筆は、たえずしづりがちで、うまく運ばないのを、せきたててどうやら文章らしき形をつくりだしたものである。大長篇を完成する苦しみは、それを敢えてした御当人でなければ、とうてい理解できないであろうけれども、次から次へ「評論」を書きつづけることに、言うに言われぬ苦しみがつきま

う。一見、無責任に、瞬間的に生みだされたような雑文たちは、たがいに血族としてからみあい、一郎は次郎に意地わるし、冬子は春子を叱りつけたりして、読者とは無関係の場所、せめぎあったり、競いあったりして、しまいには生み出した親を抹殺せんばかりの事態に立ちいたるからである。

ロケットの発射台から射ち出された宇宙飛行士は、地上から未知の空間に投げあげられたとたんに、たとえ地上からの遠隔操縦が少しは守ってくれるにしても、一切のおそろべき冒険とむずかしい計算をひきうけねばならない。泣こうと、わめこうと、あともどりは許されない。文明批評という天空に向って飛び立つという、身のほど知らずの冒険に身をまかせるとき、どのような用心ぶかい批評家でも、充分に自分の未来を計算しつくしてはいないものだ。目撃できる星のかげらや、肉眼では見えない宇宙線におそわれるのが危険なばかりではない。彼自身の肉体的、あるいは精神的状態が、一秒ごとに、どのような変化をこうむるかは、飛びつづければ予測できないのである。準備しておいた宇宙食が、はたして彼の栄養を保証してくれるかどうか。宇宙艇内、あるいは艇外の気圧や温度が、彼をどのような異様な動物にしてみようか。批評家があらかじめ貯えておいた学問と教養は、ものすごい機体のスピードのおかげで、みるみる消滅し、変質してしまうだろう。批評しようとする彼の肉体と精神は、思いもかけぬ気圧や温度の変化によって、あべこべに批評されてしまうのである。

「諸行無常」。これが私のもっとも信頼し愛好するコトバである。

すべてのものは変化する。そして、あらゆる変化するものは、おたがいに関係しあっている。この仏教の過去の定理は、そのまま現在の物理学の定理に通じている。「変化する」「関係しあっている」。この二つの簡単な定理が、どれほど複雑な議論をうみ、かつどれほどその内容を変化し、どれほど新しいめまぐるしきで関係しあっているか、想うだに目まいと身ぶるいを感じるであろう。

もしも「変るものは変るんだから仕方ないじゃないか」という、投げやりの態度を少しでも示した

ら、「では、すべてのものは関係しあっているという、ゆるぎなき第二の定理をどうしてくれるんだ」という反問が、氷山のきしみの如く溶びせかけられてくる。「現在のところ、事物や現象の諸関係は、これこれしかじかであります」と、のんきに答弁していれば「なあんだって、君は、この大変化についてまるきり無関心な、アタマのこわばった伝統主義者だったのかい」という冷笑が、足もとから冷い焰のように噴きあげてくる。

万能薬として「諸行無常」を悪用しようとすれば、いくらでもできる。ひらめく「変化」の旗をふりかざして、まじめな固定陣地に突入したりするの、やりやすいことだ。時によると、私の友人の「学士諸君」は、私の変化戦術を無責任として眉をしかめた。だが私自身は、諸行無常に甘ったれたり、ゴマをすったりしたつもりは全くないのである。甘ったれたゾと非難されたとしても、めんどくさがりの私には反論するだけの親切心のもちあわせがないし、学者文士の批判に対応しているには、ナマの諸行無常それ自体があまりにも魅力的でありすぎるのだ。おそろしいのは諸行無常先生であって、彼らではない。もしも私の「変化学」が狭く小さいとすれば、彼らの「反変化学」だって狭く小さいにきまっているのである。

一九六六年六月

著者しるす

目次

序文

A

日本の信仰	12
人間をささえるもの・文学と宗教	13
歴史と文学	24
見直そう「北海道」	32
諸行無常のはなし	34
団地の春「地球アパート」の居住者として	45
「世界憲法集」を読んで	48
「愚鈍」	51
政治悪の教科書としての「三国志」	55
政治家と文学者	58

B

苦難に満ちた記念碑・カナエの文字	70
「狂言まわし」としての悪	72
強いということ	75
箱庭の美	81
青年の宗教、老人の宗教	86
私の「中世」	89
コンピュータと経営者についての妄想と予感	92
日本人の国際感覚	103
冒険と計算	106
反俗精神	110
日本人の顔	150

愉快な社会主義者・山本健吉	152
楽しきかな食堂	153
ものやわらかな人	155
堀田善衛	157
もたれかかり女性論	158
PRあるいはCM的自伝	164
「いなか者」と「世界人」	173
文学者に悪い奴はいない	176
暴力について	177
あん蜜	180
法然上人	182
飲食男女	186
親鸞上人架空会见	188
夫婦原始林を探検する	190
枕山と穀堂	200
椎名麟三氏について	203
丈夫な女房はありがたい	203
もうすこし平等に	206
いやな先生	208

学士諸君へ	210
私は苦しかった・わが説法	314
大モノぐいの入道	223
梅崎春生の思い出	225
C	
菊の花、河、大地・中国の旅	230
宗教人の旅	236
大陸の舟あそび	239
中国女性の「女らしさ」	242
文人歓語の図	250
植物の根や昆虫の触角のごとく	266
変りつつあるソ連	273
カイロの街で	282
カイロの太陽と星	295
中国現代劇の前進	297
中国で感じたこと	300
石狩川	318

D

『裏窓』に見る庶民生活	328
なぜ戦争映画をみるか	329
映画と文学	333
記録映画『メソポタミア』を見て	341
楡の木蔭の欲望	343
顔見世大歌舞伎	344
芸術座『風雲三十三年の夢』	345
新宿末広亭にて	347
応挙から学ぶべきもの	348
日本映画の世界性	352
サアカスの演出	355
合同公演『関漢卿』	356
日本映画にもの申す	358
神々の復活	360
エロティシズムの政治学	367
ハリー・ベラフォンテ	377

E

蟹とサボテン	379
宗教映画の秘力	381
ひらけゆく北海道展	383
焼きもの	386
『新しい世界』写真展	387
『につぼん昆虫記』ロケを見て	389
映画館の楽しみ	391
現代女優論・左幸子	392
『紅楼夢展』の魅力	394
映画『怪談』を見て	397
しろうと批評とは何か	402
今年の文学抱負	404
「罪なき人々」ヘルマン・ブロッホ著浅井真男訳	405
三島由紀夫「小説家の休暇」	406
女神と泥人間	407
書き歩き一週間	409

「嫉妬」ログブリエ著 白井浩司訳	413
江藤淳氏へ	414
百人一首	415
「完本・高見順日記」昭和21年篇を読んで	416
大風起って	418
岡本太郎著「黒い太陽」	419
中村光夫著「想像力について」	420
中野重治著「忘れぬうちに」	422
文化界への直言	425
「小島信夫集」解説	424
夢と現実	433
「私」への反省	438
スタンダール「赤と黒」	440
わが小説「森と湖のまつり」	442
実業家の書いた本	444
こちらが研究不足	447
文学を志す人々へ	448
魯迅と中野重治	454
朝日ジャーナル編「日本の思想家」(1)	455

三島由紀夫著「美しい星」	458
「孫子」の兵法	460
本多秋五著「続物語戦後文学史」	463
作家の自己弁護	465
巻頭言	468
怪人二十面相	468
中国語のおもしろさ	471
梅崎春生著「狂ひ風」	475
悪書	476
「序曲」について	478
私の書きたい女	480
はじめての本「司馬遷」	482
私の小説作法	483
貴重な現地報告「泥と炎のインドシナ」	485
忠勇なる諸氏よ	489
<i>F</i>	
思いつめる	494

原子へ還る……	495
仙人はどこにいる？……	496
うつされたがる……	497
あのころの楽しみ……	498
中年男は痛感する……	499
批評家さまさま……	500
宗教と文学……	501
まじめな文士……	502
作家の生き方……	503
めがね……	504
“文化望遠鏡”を……	506
病氣と文学……	507
女傑なるかな……	508
親孝行……	509
かなしい動物……	510
雨ニモマケズ……	511
中途はんば……	513
文学者、政治を語る……	514
酸素と化学肥料……	515

日本的なるもの……	516
静かに、ゆっくりと……	517
行動主義、今いずこ……	518
「国際小説」とは……	520
車上の批判者……	521
巨大なるもの……	522
狂った妻……	523
別荘について……	524
何となくゾッとする……	526
楽しいかな・筆談……	527
めいめいの風景……	528
心配する必要はない……	529
やや荷風式に……	531
青の神秘……	532
黄色は何を求めるか……	533
ラムネ、水族館、熔岩……	535
富士山……	536

冒険と計算

A

日本の信仰

「信仰」について書くのは、実に息ぐるしい。僕が書くと、どこかが嘘に
ったり、そっくり無意味になることが、ほとんどだからだ。「宗教」の大道
具や小道具にはどことなく、グロテスクな、みじめな残骸といった所がある
場合が多い。山中の大岩石を眺めていた方が、気が楽である。ぼくは十円ぐらいなら、オサイ錢をあげ
ることがある。今年、ミナトガワ神社では三十円あげた。二十代で召集され、輸送船に乗る直前に、二
等兵みんなそろって、拝んだ。それから、二十年ぶりである。拝んだから、命がたすかったはずはな
い。拝んでも死んだ者が、いくらもいるのだから。何故、三十円にしたかも、よくわからない。「二十
年ぶりで三十円とはケチだな」と、同行者に軽蔑された。拝むことそのものが、悪いとは思えない。他
人の迷惑おかまいなしに、威張ったりするより、いくらかいだらう。うまく拝む気持になれば、ぼ
くだって拝みたいのだ。妙にしんみりして、拝みたい気持になることがある。しかし、何かに邪魔され
るのか、なかなか一心不乱にならないので、拝んだか拝まなかったか、結局はつきりしないですんでし
まう。ドストエフスキイの大長篇には、信心ぶかい農民の挿話が多い。あれには、感動する。いいナ、
と思う。オサイ錢を上げるのは、人によっていい気持だろうが、もらうのは厭な気持がするだろう。し

なかったら、不思議だ。北海道でも、九州でも、炭労の役員が、新興宗教Sの進出についてコボしていた。現在の組合では、なかなか「信仰」問題まで、手がまわりかねるらしい。もしもシヤカやキリストが生きていたら、現在日本の「信仰団体」や「宗教設備」の大部分を、新旧にかかわらず、消滅させるかもしれない。そしてもう一度、王城から脱出し、十字架にかけられるだろう。ぼくが、今一ばん拝みたくないのは、天皇だ。レニンは好きだが、レニン廟も拝みたくない。山村の路のはずれの石地藏や馬頭観音の方が、よっぽど親しみがあがる。

(一九五八・二「群像」)

人間をささえるもの

文学と
宗教

いったい、私は、ほめるのが好きなたちですが、だから、武田がほめても、あれは、あまりあてにならない、といわれている人物であります。今日は、宗教をほめるのですが、私にとって、ほかのものをほめるよりも、はるかに気が楽です。というのは、宗教というものは、私がほめるほめないにかかわらず、厳として存在しているものであって、私がもしあやまって発言をしても、宗教はなおそれを吸収し得る巨大なる、なにものかであるとおもうからです。

もっとも、高等学校の時代には、私は寺にいたが、宗教については、あまり興味がありませんでした。しかし、このごろはだんだん宗教というものに、自分がちかづいていっていることを感じるのです。文学をやっていると、なにものかが私を宗教のほうへと導いてゆく。どこへ導かれるかということとは、申しあげることができないのですが、宗教というものがあって、私をさし招いている。それははっきり申しあげることができます。

私がそういう気持になりつつある第一の要素は、私が兵隊となって戦場におもむいたことのなかにも

とめられます。そのつぎは、おおくの国を相手にして戦っていた日本が、その戦いに破れた瞬間、この私というものが、まないたに乘せられた魚のようにして、世界の人々の前にさらされていた、ということにおいてであります。

戦争というものは、じつに複雑な矛盾をふくんでおります。だれも好んで行うものではないが、自分の国家と家族・先輩・子孫をまもるための戦いであるのに——人間を救うために戦うはずであるのに——、戦場にひとたび出ると、人間を殺すことが、もっともひつようなことになってくる。そこでは、人間を生かそうという心と、人間を殺すという現実が矛盾しあう。しかもそれは、自分自身のなかで矛盾するばかりでなくて、軍隊そのものが、人間を殺さなければならないという任務を持っておりました。

ちかごろの戦争映画をみるとおわかりのように、ロシアでも、アメリカでも、フランスでも、イギリスでも、それらは、もはやけっして自分の国がたいたいというだけの映画では、お客さんが入らない。ことにアメリカの戦争映画では、自分の軍隊にもひじょうに悪い行為をする者がある、戦場に出て戦えば、血なまぐさいことも、いやらしいことも、醜いこともやらなければならないのだということ、をはっきりえがいております。

自分は、ヒューマニズムに燃えて戦争を開始し、しかも、戦争をやりつづけるのであるが、そのヒューマニズムに燃えている自分自身が、じつはアンチ・ヒューマニズム、人間らしくない行為をしなければならぬということ、を、まっさきにスクリーンに写し出す。なぜそうするかといえば、映画も世界市場において売りさばかなければならないから、自分の国民だけに納得されるようなものであってはいけない、世界各国の人々にも、もっともだと思わせるようにつくる必要がある。つまり映画も一つの商品ですから、その商品を完全に売りさばくためには、相手が納得するような内容のものであることがたい